

住民に愛され親しまれる 土木技術者に

堀川 直 義*



土と木の原点にもどれ

わが家には、土木彦という名前の孫がいる。この子のパパが名付けたのだが、わが子を土木技術者に仕立てたいという願いからではない。人間に最も親しまれる自然の、土と木にあやかってのことである。

天の星にさえ、われわれは土星や木星の名をつける。週日にも土曜と木曜をつくることを忘れない。土と木とは、われわれにとって一番身近かなものである。日本の家屋は、もともと土と木からできていた。われわれは土に生き、土の道を歩き、土を耕し、そして土には緑の木々が生い茂っていた。英語では、シビル・エンジニアリング、あるいはパブリック・ワークといわれるものを、わが国では土木または土木工事と呼んでいるのは、まことに含蓄のあることばに思えてならない。

ところが、近ごろの土木は、自然の土と、緑の木を破壊するコンクリートと鉄の工事と化し、土木工事ではなくて“コン鉄工事”となってしまった。わが家の付近に環状何号線が完成したおかげで、庭のじゃくなげは枯れるし、もくせいは花がつかなくなった。私の学校の校庭の中央には川が流れているが、私たちの嘆願にもかかわらず、都の土木工事で土手の美しい桜並木は切られてしまい、不粋なコンクリートの護岸の上には、ものものしい金網の柵が設けられた。

工事促進から拒否の運動に

このような体験は、私だけの特殊なものではなく、多くの一般的市民が味わっている経験である。そこでこうした土木事業を計画し、設計し、指揮する土木技術者は、われわれ市民にとって、うとましい人間像として映るのは当然のことであろう。

むかし、といってもほんの少し前までは、土木事業は、われわれにとって感謝の対象であった。土木工事は便利な橋をかけてくれた。ぬるみの道を舗装して

くれた。すぐ詰まるドブを衛生的な暗きよにしてくれた。われわれは、市役所や議会などに、橋をかけてくれ、道路を直してくれ、下水をつくってくれと陳情したり、請願したほどである。

土木工事をしてもらうことは以前は恩恵だったのである。

ところが、このごろはどうだろう。その逆である。むかしから住民運動はなかったわけではない。住民運動のやり方も変わってはきたが、その内容も、“土木工事をやってくれ”の住民運動から、“その土木工事をやめろ”の住民運動に変わってきたのである。それはなぜだろうか。その原因はまことに簡単明瞭である。以前の土木工事は地域住民に便益を与え、生活環境を改善することに奉仕してくれたが、このごろの土木工事は地域住民の生活に脅威を与え、日照権を奪ったり、空気をよごしたり、騒音や振動で環境を破壊するからである。

アセスメントの親しい感覚

住民の陳情によって、初めて着工する後手の土木工事は感心しない。住民の要望を先取りする土木工事が望ましい。しかし、このごろの土木工事は住民の要求を先取りするどころか、住民が望みもしない、むしろいやがる工事を先走ってやるように思える。

このごろ、アセスメントということばが、しきりに使われる。私たちが中学校で習ったアセスメントという単語は、評価とか評定とかいう意味だった。したがってそれは、事が終わってからの事後評価であった。しかし、今日いうところのアセスメントは事前評価の意味であるらしい。しかも、環境アセスメントと熟することが多い。また、以前はその評価を専門の技術者がやったから、おおむねテクノロジー・アセスメントであった。ところが、いまでは、技術的専門の評価だけでなく、住民による評価が大切になってきている。アセスメントが、ただの評価ではなく、“環境事前住民評価”の意味に変容しているところに今日の意義がある。

新しい時代の土木技術者は、単に土木工学について高い学問と専門的技術を身につけるだけでは足りないようである。土と木の自然を愛し、コミュニティーの構造や作用を理解する社会的な知識と、住民の欲求や行動を知る心理学的な教養も必要であろう。その条件が満たされるとき、地域住民との良い人間関係が生まれ、うとましい人間像から親しまれる土木技術者となるであろう。

(1976.4.20・受付)

* 文庫 成城大学教授 文芸学部マスコミュニケーション学科